

坪田譲治 草稿「愛魚随筆」(ノートルダム清心女子大学所蔵) -- 解題と翻刻

著者	山根 知子
雑誌名	清心語文
号	9
ページ	153-157
発行年	2007-07
URL	http://id.nii.ac.jp/1560/00000258/

坪田譲治 草稿「愛魚随筆」(ノートルダム清心女子大学所蔵)

——解題と翻刻——

山根 知子

はじめに

草稿「愛魚随筆」は、二〇〇五年度から本学日本語日文学科で坪田譲治の草稿や初版本の収集を始めている坪田譲治コレクションの一つである。この随筆は、これまでの数種の坪田譲治全集のいずれにも収録されていない作品であり、もはや読者の目に触れにくい随筆となっている。しかし、譲治の生前に出版された単行本には再録までされておらず、譲治にとって思い入れの深い随筆であると考えられる。

解題

まず、草稿および作品発表をめぐる状況を記したい。

■「愛魚随筆」現存草稿の状態

《原稿用紙》 四〇〇字詰め原稿用紙 四枚

山吹色罫

「盛文堂 No・2……B……」^① 印刷原稿用紙

《筆記用具》 すべてブラックインク。

《草稿への編集上の書き込み》

第一葉の題名右余白に朱筆で左記の書き込みあり。

新潮／「虫・花・雲・」随筆／狙足

し／(三岸氏の後へつゞく)

■「愛魚随筆」発表状況と題名変更

《初出誌》 「新潮」通巻四〇八号 昭和十三年九月

※草稿上に「魚随筆」から「愛魚随筆」への
題名変更が見られる。

《単行本初収録》 『故郷の鮎』協力出版社 昭和十五年二月

《単行本再録》 『朝日文化手帖14 児童文学入門』朝日新聞社

昭和二十九年一月三〇日

※ この再録時に「愛魚随筆」と改題。

まず、作品収録の経過において変更の見られる題名については、草稿の翻刻でもちに示すように、執筆当初「魚随筆」であったが、あとで「愛」の文字を入れ、「愛魚随筆」となっている。また、編集上の朱書き込みによると、編集者の発案かと思われるが、「虫随筆」「花随筆」「雲随筆」がその後続けて書かれることを期待されていたのではないかと推測される。しかし、現在の調査では「新潮」誌上でも他においても、こうした題名の譲治の随筆は見当たらず実現していないようである。なお、単行本再録の際には、題名の「随筆」を「雑筆」に変更している。

次に、この作品の内容に関する点について触れたい。

冒頭の文章「鮒を釣るのに一時私は夢中になってゐた」と述べる「一時」という時期については、譲治生前に発表された水藤春夫作成年譜（『坪田譲治全集』第二巻 一九七八年五月 新潮社）によれば、「昭和七年（一九三三） 四十二歳」の項目に「秋ごろから釣の味を覚え、しきりに山の池に出かけるようになる」とある時期を指している。もちろん魚に関する思い出については、譲治の幼少期における記憶からもしばしば作品や随筆に表現されているところであるが、この随筆では、譲治が作家希望でありながら、妻子を支える生活のため岡山の実家の島田製織所に取締役として勤務し、不本意な仕事や人間関係の憂さ晴らしに日常を離れたかと思ひ、釣りを始めたという時期が思い出の対象として書かれている。

なお、この随筆を最初に発表した昭和一三年九月という時期につい

ては（執筆時期についても本文中に「八月号の中央公論を見ると」とあることから昭和一三年八月頃に書いたものであると推定される）、すでに岡山を離れて東京での作家生活に戻り、昭和一〇年から「お化けの世界」「風の中の子供」「子供の四季」といった譲治三部作と言われる作品を次々と生み出し、ようやく作家としての名声が高まった時期である。この岡山を離れてから東京で暮らすそれまでの間には、釣りに親しむことがなかった。そうしたなかで、昭和一三年時点でのこの随筆では、先の昭和七年頃の岡山での釣りが思い起されているのである。

ちなみに、同年譜では、翌年の「昭和十四年（一九三九） 四十九歳」の項目の「四月」には「はじめて信州野尻湖に遊ぶ」とあり、同年「十月」には「再び野尻湖に遊ぶ。以後十年、五月になると野尻湖に赴いてハヤ釣りをするようになる」と記されている。ようやく文壇や世間に作家として認められ、作家による生活が可能となった譲治は、この頃より多少の経済的ゆとりから野尻湖に赴き、釣りができるようになる。そこで、本随筆に込めた魚への思いを再び味わうかのように釣りを始めていることは注目に値しよう。野尻湖では、やがて湖畔の民家を買ひ、そこを別荘としてたびたび東京から赴くようになる。野尻湖についての譲治の思いについては、三男理基男氏の証言によると、「父は自然豊かな風景を見るとこでも、ここは岡山に似ていると言っていました。父にとつて野尻湖の風景の一部にも岡山が見出されていたものと思われます」ということである（二〇〇六年一月の筆者の取

材による)。本随筆はそうした人生の感慨のなかで、のちに野尻湖での釣りに向かうようになる譲治の内面を、自ら深く認識することとなった内容であったと意味づけられよう。

ところで、「愛魚随筆」を初収録した単行本『故郷の鮎』は、第一随筆集『班馬鳴く』（昭和十一年一〇月 主張社）に続く第二随筆集である。この『故郷の鮎』には、魚や釣りに関する随筆として「鮎釣りの記」「愛魚随筆」「鮎釣りの夢」「湖上の秋」「赤城大沼にて」「湖畔吟」の六編がある。なかでも随筆「愛魚随筆」と「鮎釣りの夢」には岡山時代の釣りの思いが描かれており、この単行本名『故郷の鮎』を代表する内容となっている。なお、第一随筆集『班馬鳴く』では随筆「夢に釣る魚」があり、昭和七年当時の岡山での釣りについてはさらに詳しい事実も書かれており、あわせて読むと、釣りに対する譲治の切ないほどの思いの表現が見られる。さらに、『故郷の鮎』における先の六編中の三編「湖上の秋」「赤城大沼にて」「湖畔吟」では、「湖上の秋」が野尻湖を、「赤城大沼にて」「湖畔吟」が赤城山上の湖である大沼を訪れた感慨が述べられている。なかでも「湖畔吟」では、次のような記述より、岡山での釣りの擬似体験を求めつつもなお、遥かに得がたい譲治の故郷への思いが偲ばれよう。

この赤城山も深山で、大衆の英雄国定忠治が山籠りしたほどの山であるけれども、今は湖畔にキャンプが並び、湖上をボートが点々とすべつてゐる。ボートのなかには女学生や女事務員が洋装で乗つてゐる。それは決して悪いことではないのだが、もう少し

深山の湖といふ趣があつたらと私は考へる。溪谷を伝つて、この山上の湖畔にたどりつき、そこでこの大鯉をものにしたら、その心持また何に比すべきであらうか。実は私はこの六月末野尻湖に遊んで以来、山湖の幽邃、その静寂を求めて、この大沼にも来たのである。満足し難いとは言へないけれども、望蜀の感なき能はず。

では次に、随筆「愛魚随筆」で回想された場である岡山の「山中の池」とはどこだろうか。それは、随筆「夢に釣る魚」等からも、最初は姉政野が嫁いだ御津郡御津町大字紙工天満（現岡山市御津町天満）の家に近い「いんのう池」であつたといえる。他にも随筆「川の鮎・池の鮎」（随筆集『班馬鳴く』所収）によれば、その後その方面へ行く途中の「今岡の三つ池」にも足を運ぶようになったという。とにかく、譲治の故郷における魚との戯れの場合は、幼い頃は村の川であつたのに対して、この四〇歳代の頃は静寂な山中であり、一人での池釣りが主であつた。その池で譲治は、「妄執の人間の中」から離れて「まだ明けきらない朝、池は神さびたる太古の姿、私はそこに自然の神ニンフやサチールの世界を見るような気がするのだした」（『川の鮎・池の鮎』）という自然の神々の世界を味わうのである。こうした事実をめぐつても、その当時の譲治の心境が垣間見られよう。

以上のような随筆の内容を踏まえて、譲治の釣りに対する感慨や魚についての言及をさらに考察することは、譲治文学の本質とも関連し、今後の研究の重要な課題であるといえよう。

〔翻刻にあたって〕 凡例

一、【 ↓ 】内の記述は、自筆手入れを示しており、矢印前の記載が、譲治の書いた第一形態であり、矢印後の記載は、同じイंकによる自筆手入れ内容である。

二、二字の重ね字は、草稿の表記通り「／＼」を用いた。

三、不明な文字については〔○字不明〕とした。

四、編集のための文字や記号は除いた。

五、旧漢字は新漢字に改めた。旧仮名づかいはそのままとした。

（以上）

翻刻

〈第1葉〉

【（無） ↓ 愛】魚随筆

坪田譲治

鮒を釣るのに一時私は夢中になってゐた。人目を忍んで、山中の池にゆく程であった。と言って、鮒を憎んでゐる訳では決してなかった。釣りをする人に、魚が憎いからと言ふ人は一人もあるまい。【（三字不明） ↓ まづ】愛すればこそである。愛するものが、愛するものを欺いて、鉤にかけるといふのである。何となくむじゅんしているやうに考へられるが、その間の心理【（三字不明） ↓ 削】は私には【（無） ↓

説明】出来ない。

然し鮒釣りに執心してゐた間、いつも心【に ↓ を】離れなかった【こと ↓ 空想】は、鮒と化して、池底に遊びたいといふことであつた。干あがつた池を見ては空想【（一字不明） ↓ の】余地もな【（二字不明） ↓ か】つたが、水中にゆらめく藻【の ↓ な】を見ると、私の空想は妙に神秘めいて行つた。六七年前、岡山に近い山中の池で釣りをしてゐた頃、十一月頃で朝から秋さがシト／＼降つてゐたが、何処からか、私

〈第2葉〉

は【（無） ↓ 断続する】琴の響を終日聞いたのである。その後も度々その琴の弾奏を聞いたけれども、今に不思議でならない一つである。村まで、人家まではどうしても五六町はあるのである。初め私はラヂオを何処かでやつてゐると思つてゐた。そして気にもかけず、釣りと共に感興をそれに託してゐた。何日かの後、それが不思議に思へ、折々山へ登ったりして、近くの人家を物色した。然しそれらしい家は軒もなかった。村の古老などに言はせれば、狐のしわざくらいのところであらうが、もしかしたら、そこは谷間であつたので、気流の関係か音響の具合か何かで、【（無） ↓ 近村の】琴の師匠の家の音でも響いてくるものであつたかも知れない。が、もう一つ、私には、この鮒釣りの感興が自分の心の琴線にふれ、自然に高く鳴り出たものとの説明も考へられるのである。実はそれほど、鮒釣りといふものが私を魅了し

てゐたのである。

八月号の中央公論を見ると、春夫佐藤先生

今回の解題と翻刻に際しては、坪田譲治の三男坪田理基氏の協力を賜りましたことを、深謝いたします。

〈第3葉〉

の雨月物語清涼抄といふのが【ある。↓あり、】夢底の鯉魚といふのが書かれてゐる。延長の昔、三井寺に興義といふ坊さんがゐた。【（無）↓魚の】絵で世間に名が通つてゐた。漁夫や釣師などから魚を貰ひ受け、それを【（無）↓もとの】水中に放つて遊び廻るのを見てゐる内、遂にえも言はれるところを【（無）↓会】得し、時には夢の中で大小おもひくの魚と遊ぶことがあるに至つた。目がさめると直にこれを描いて、夢底の鯉魚と題した。乞ふものあつても、殺生をして、なまぐさを上る世俗の人にはやること【が↓は】出来ないと言つた。そして後に三尺の大鯉になつて、琵琶湖を遊び廻るのである。

魚を愛する【（無）↓ロマンチックな】物語として、昔から私愛誦のものであるが、釣する心を殺生すると描かれてゐる点納得出来難い。私などはもう鮎と遊びたい一方なのである。鯉なれば言ふ迄もない。それなのに、鮎も鯉も、私など寄せつけてくれない。仕方なく鉤にミ、ズをつけ、欺いて彼を吾々のものとするのである。思へばこれ、

〈第4葉〉

美しき女性にも似てゐるであらうか。罪深きは人間の、エゴイズムか何か知らないが、かかる心である。

（やまねともこ／本学准教授）